

## 【翻刻】 滑稽窮理 臍の西国

真貝 寿明

情報科学部 情報システム学科  
(2021年7月30日受理)

Transcription of “Kokkei Kyuri Heso-no Saikoku”

by

Hisaaki SHINKAI

Department of Information Systems

Faculty of Information Science and Technology

### Abstract

We reprint “Kokkei Kyuri Heso-no Saikoku” (1875), a Rakugo-style (comic storytelling) book of science ingredients for general readers. The author was Morimasa Masuyama (1827–1901), a medical doctor and later an education bureaucracy. The book contains five stories with traditional Rakugo story-lines, and those plots are briefly explained together with a couple of new interpretation. From the contents, we can feel the movement to science geeks in the first decade of Meiji-era in Japan, and also infer the levels of standard knowledge at this period.

**キーワード** ; 理科教育史, 明治期, 西洋科学の受容, 窮理学, 落語, 増山守正

**Keyword** ; History of Science Education, Meiji-era, Process of Acceptance of Western Science in Japan, Natural Philosophy, Comic Storytelling, Morimasa Masuyama

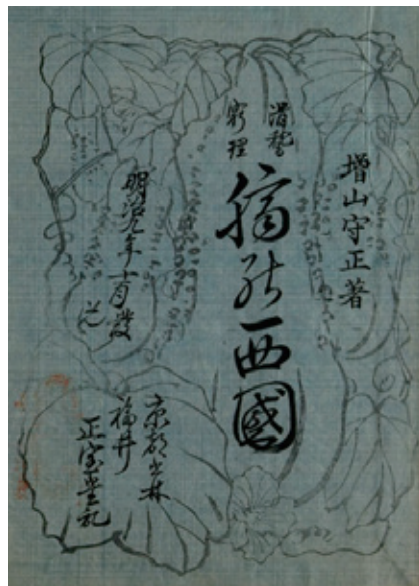
## 〔翻刻〕 滑稽窮理臍の西国

明治初年に、小幡篤次郎が『天変地異』を、福澤諭吉が『訓蒙 窮理図解』を出版したことから、窮理熱ともいわれる出版ブームがおきた。その出版数は明治5、6年だけでも60点以上になる<sup>(1)(2)</sup>という。いずれも米英の子供向けの本からの抄訳であったが、開国の掛け声とともに、学制公布より一足はやく、旧来の学問とは異なるスタイルに人々は夢中になったようだ。そのような出版物の中で、窮理をネタに仕込んだ落語の本『滑稽窮理臍の西国』(明治7年6月序、同9年11月刊、正宝堂)がある。

著者は増山守正(1827-1901)である。静香園丹蓉と号した。丹後田辺藩の出身で、幕末に江戸で医学を学び、藩にもどって医を開業し、後に京都府の官吏として医学や教育関係に従事し、再び上京して文部省や博物館に勤めた人物である。増山の伝と著作のリストは、本人によるものが、晩年に出版した『明治新撰 百家風月集』(明治27年<sup>(3)</sup>)の追録にある。生涯に24点の著作があるが、本書は著作としては初期の頃、本人の四十半ばの頃のものになる。増山は『天象地球略解』(明治20年)や動植物系統図など若干のサイエンスものを出版しているが、その他の多くは旅行記・詩集・小説であり、広く身につけた教養を多方面に展開させた。墓は東京・谷中霊園にあり、遺言は「虎は死して皮を遺し、人は死して名を遺す。須く著作を後世に遺すべし」だったと伝えられている。

『臍の西国』とは、現代では「へそが茶を沸かす」と同義で使われている「臍の西国巡礼」を意図したタイトルである。周知の落語をベースにした5つの題目があり、オチはよく知られた落語の筋書き通りだが、それぞれで窮理学の紹介が(ときには強引に)されている。今日では「窮理学」を「物理学」の元の言い方として捉えることもあるが、本書を読む

と、動物・植物から天文に至るまで幅広く登場しており、「窮理」とは自然科学全般を指すことがわかる。また本書から、窮理熱の一端を窺い知ることができ、当時の人々の知識レベルも推察できる。はたして、本書の落語が実際に上演されたとは思えないが、同一の内容で『臍の西国あご落とし』(明治19年12月刊、耕文楼)と改題されたものも再販された。



表紙：舞鶴市所蔵版<sup>(5)</sup>より。  
胡瓜の絵柄が施されている。  
Original Cover: From the one  
owned by Maizuru City<sup>(5)</sup>.

本書は国立国会図書館デジタルコレクション<sup>(4)</sup>および舞鶴市糸井文庫所蔵版<sup>(5)</sup>が公開されているが、影印も入手できる<sup>(6)</sup>。この翻刻では、できるだけ忠実に旧字を用い、句点も原文どおりとしている。かなは現代のものに改め、ルビは原文どおりだがおよそ初出のところのみとしている。原本で行左側に添書きされたものは割注とした。また、原本では、各話ごとに段落分けはされていないが、ここでは適宜改段落した。本稿では、最後に各話の若干の解説を付けるとともに、内容に関するいくつかの考察を加える。

滑稽  
窮理 臍の西國

## 序

夫れ理は乾坤當に然るべきの道にして。萬古に亘て變易すべからざるの真理を指して云の詞なり而して別に一種の虚理なる者あり。是れ真理の反對にして世に所謂理外の理と云者之に近し畢竟滑稽落語徒に人の頤を解くの具にして。實事に於て益なしといへども其中人意の表に出る奇機妙關を存する者有て捨べからざる者あり因て諸家窮理の語を拾ひ雜ゆるに世上滑稽の落語を以て結局し纂述して一小冊子とし滑稽窮理臍の西國と題し上梓して世に公にす庶幾くは虚實錯雜滑稽窮理永く理外の妙理をして地に墜墮せさらしめん事を欲し且は男女幼童勤學の徒永晝長夜睡魔を驅り懶鬼を逐ふの一助とせんと言爾

明治七年六月

丹波綾部 増山守正撰

1 孜孜々せつせと。

2 鬻ぐ鬻る。

滑稽  
窮理 臍の西國初編

丹波綾部 増山守正纂述

## 手與指相違

豪華主人翠樓に登り。千金を抛ち娼妓(タハブレ)に誇り。酒は泉の如く肉は林の如し。廓中最上の美人に契り。比翼の情日に深く連理の思ひ月に厚し雲には衣装かと思ひ花には容かと疑ふ晝参夜参孜々として魂は脱(ヌケ)する如く廓は家の如し心酔の餘り人に向ふて曰。誰か云娼妓誠なしと諺に云ふは真なり實なり彼妓の美麗玉か花か願くは輕羅となつて細腰に附ん願くは明鏡となつて嬌面を分たん。彼妓我れに誓て三千世界君より外に身を託すべき夫なし。譬へ野の末山の奥竹の柱に茅の屋根手鍋一つの住居でも石の枕をするとても何か厭はん偕老同穴は固より堅き約束と戀慕し依頼すと誇る。一友笑て捧腹し足下知らずや古歌にいふ「手折ても心許すな山櫻夜は嵐のふかぬものかは」況や足下未だ家へ娶らず賣妓(オヤ)の誓約期し難し夫れ情を賣り色を鬻くは娼妓の習ひ虚言も深く咎むべからず。足下何ぞ如此沈溺の甚しき。諺に云はずや。女郎の誠と卵子の四角有れば晝夜に月の出るの句あるを知らずや。主人少しく憤て曰彼れ我れと死生を以て契る。情味の濃なるは兄(イ)らを知る所に非ず。女郎に誠はないとは云へど誠買出す客無と云句を知らずや。我れ金銀の花を咲せて彼れが心を樂しむ。彼の妓余を慕ふに雲

雨巫山の情を以てす。兄妄りに彼妓と水も泄らさるる契約の情を離間する事勿れ。

友人益笑て曰兄彼れを愛するに金を以てす。抑金を以て心を釣り欲を以て人を懐くるは昔日の事。當時は則文明開化彼れに窮理あり此に化學あり妓樓娼廓に至ても亦金錢を賤しき窮理を尊ぶ兄若し彼れが愛情を得んと欲せば早く窮理書を讀め速に化學に就け。君が最愛の妓既に他窮理先生の有となるを知らずや。主人笑て曰虚言々々人を愚弄する事勿れ。彼妓決して虚契に非す弓矢八幡我を欺かずと云て覲爾(ロリ)たり友人輾轉捧腹呵々大笑して曰。腹痛く々々臍去る々々。嗚呼男子たるもの沈溺の愚如此に至る者乎。予前日樓に登り襖を隔て、親しく彼の妓の窮理先生に謁し問答の情話を聞く。彼先生初會にして彼妓の色を挑むの態(ス)あり。彼妓驕氣應ぜず上頭の威權に驕り容顏の美麗に誇る。

先生從容説て曰東京某氏著書の序文に曰。氣類の相感する海に住む魚は波紋の鱗あり。地に臥す獸は草葉に似るの毛あり。木に宿する鳥は木葉に似るの羽ありと。真に確言と云べし汝妓樓の氣類に染て人心を失ひ。微々の容色に驕り上頭の威權に誇る。井中の蛙管見の天憐むべし抑大を語れば日月星辰小を語れば蠢動微物億々萬里の天に億々萬數の星あり。億々萬分の地に億々萬分の蟲あり。所謂三千大千世界。暗夜に仰く綺羅星は皆太陽や世界とか聞も驚愕其上に古来天漢<sup>3</sup>又一つに天の河として白布を引た如きの天象は皆衆星の州寄ぞと聞は聞程乾坤は斯も大なる物哉と思ひ回せば回

3 天漢＝天の川。  
さんずいに白工。

4 村松良肅(1827-1876)著の『登高自卑』(明治五年出版)。

5 ■は

はす程我か小きなる知慧囊。胸塞りて氣も遠し。左程大なるばかりかと。見れば億々萬分の。地には億々萬分の。蟲あり顯微鏡力を借て檢せば微么なる。蟲も細爾の蠢物も。各々首足臟腑をは具へ經絡關節や毛羽筋脉知覺迄備へざるもの更になし。分子の小を論すれば。梅花一輪満室に薫り麝香は幾年も其馥郁を失はず。大と云小と云ひ貴と云ひ賤と云ふ畢竟二にして一にして二何れに六十餘元素に歸して。造化精巧の妙機に出ざるなし。何れを上等と誇り何れを下等と賤しけむや。動植の間に。ポレーペンあり。草木の間に竹牡丹藤萩の類あり。蟲鳥の間に蝙蝠あり。鳥魚の間に飛魚あり。魚獸の間に海馬水牛あり。人鳥の間に鸚鵡あり。人獸の間に猩猩の類あり。登高自卑<sup>4</sup>の書中に云ふ。動物植物其科は。同じからねと動植の。中間にして分界の。殆ど髪を容れぬあり。喩へて見れば動物は常に動けど植蟲や。牡蠣(カキ)の如く動かざる。物もあるなり植物は恒に動かぬ物なれど。「哇里斯■里垂」<sup>5</sup>なる物は花作し實をば結ぶ時。能く動くなり植物に。胃なし去れ共其葉能く。小蟲殺し其液を吸ふ者もあり動物は。能く痛痒を知る植物も。之に觸れは忽に其葉收縮知覺する。又動物と植物と。合せて一體なる有りて。春夏は草で秋後にて。枯れて其根は變化して。蟲となるあり又草に。仙桃草といふあり。蟲あり芒種其後に。翅足を生し其殻を。破て去りて秋は又。土中に蟄し春待て其尾先より芽を生し。蟲又變じ草となる。云云とあり。人畜より草木に至るまで各品毫も間隔あることなし。



為<sup>リ</sup>妾<sup>レ</sup>為<sup>ル</sup>妻<sup>ニ</sup> 乏<sup>シ</sup>潔<sup>ニ</sup>貞<sup>ニ</sup>  
 妓<sup>レ</sup>楼<sup>ツ</sup>且<sup>ツ</sup>況<sup>ヤ</sup>表<sup>スル</sup>傾<sup>マ</sup>城<sup>ヲ</sup>  
 伐<sup>レ</sup>柯<sup>ニ</sup>其<sup>レ</sup>則<sup>ニ</sup>看<sup>レ</sup>来<sup>ニ</sup>遠<sup>シ</sup>  
 至<sup>ニ</sup>近<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>反<sup>レ</sup>対<sup>シ</sup>情<sup>ヲ</sup>



図1：第一話の挿絵と画讃の翻刻。

Fig.1 Figure of the first story. (2)

然るに汝鎖々たる賣妓の賤業に誇る其心小にして且つ賤しく。朱に染りて赤くなり。人の産業を傾く事量り知るべからず。近世の名句に「父母の寒さに凍し雪の肌解て流る、川竹の水。」又云「思ひきや枕にあはす肱さへ6城傾る力ありとは。」又川柳に「傾城の涙で蔵の屋根が泄る。」「傾城はかしく7の文字で客を釣る。」など真に恐るべし。水は方圓の器に従ひ人は善悪の友に従かふと古語の虚假ならざるを知ると云ふ彼妓大に悟り。心を卑くし身を謙り前時の驕慢無禮

6 肱<sup>ヒコ</sup>肘<sup>ヲ</sup>。 7 かしくは、手紙の末尾かしこの女性言葉。 8 是は図の異体字で口に口に面。 9 結跏趺坐<sup>ケツカフササ</sup>座禪<sup>ザゼン</sup>を行う時の座法。 10 是は旨の異体字で上に目。

を謝し。真誠に身を窮理先生に附託し。翠帳紅閨の内媚を盡して曰願くは君の一夜の情誓て妾が百年の齢を縮むとも悔べからず。今日君に誠を獻ずるの證。先つ妾が指だも切らむと云しと語る主人聞も敢ず驚き怒り且つ泣て曰。憎し々々彼れ我より外に男子を持す終身心を變ぜずと云。何ぞ<sup>ハカ</sup>らむ。斯く反復表裏の情有らんとは指迄切ろとは何事ぞ而して僕の事は何とか云ひし。友曰君とならば手を切らむ

### 無言問答

一禪寺の僧。十歳許の小僧聰明敏才禪機を得たるを呼び令して曰。夫れ禪は以心傳心不立文字の道にして。樹下石上結跏趺坐の功を積み心を煉て直指人心見性成佛の境に入るの宗。10單刀直入の心法なり然るに利口の姦僧其心法を守の實なく徒に末技に走り。唯口舌を以て勝を求む。是れ小兒の戯にして。真に祖師の罪人なり。此以後問答底の旅僧あらば他出に託して之を避けよ。小僧唯々として退く。

諺に云人を評せば席を設て待てと。忽見る一旅僧慢氣禪を。呑み法戰一喝天を蹴るの勢ひ。来て師に謁せんと欲して在否を問ふ。小僧誤て寺に在りと云旅僧然らば法戰を試んと云小僧急遽詞改て曰法戰ならば則他出なり。汝疾く去れ旅僧曰法戰ならばすなはち他出とその意を解せず真偽如何。小僧曰真以て他出なり。旅僧

曰他出ならば是非なし。見る所足下頓才有り一話を試んと云小僧曰諾々三界も須彌も四州も打込て咽喉にさへす吞却の僕なり問答望まば法堂へ廻れと云旅僧大に憤り憎き小僧め己れ一話に道場を蹴破り呉んと。其勢ひ列風の如く法堂さして猛り行く。師僧之を聞て大に窮し。毛を吹き疵を求る小僧何と今更處置もなく。跣天踏地戦競々（ニセグマリチニスキアシオノキオソレ）。竊に耳を法堂に貼して事の状を聞く小僧は毫も怖るゝ色なく。意氣揚々と中央の禪椅に腰を安んじて師僧の塵尾を斜に構へ天上天下唯我独尊。疑問残らず持ち来れと云ぬばかりに師の坊の警咳容儀寫真して待つ

間違しと彼の旅僧来り進て小僧に向ひ。普通問答陳腐（フルク）なり。先づ浪華津の某氏著書に載せたる無理問答暗誦せんも亦一興。我れ問ふ汝答んや小僧笑て何事を尋るやらと思ひしに浪華土産の洗濯平誦誦固より覚えあり汝問べし速に答呉んと塵尾を取り左右拂又一拂す。旅僧進で問て云虚言を發を鉄砲といふは如何に。答て曰真言を真劍と云が如し。錢を御脚と云如何ん一文づつ脱すを草鞋と云が如し。天に箒星とは如何。地に空豆あるが如し。■頭11を藥罐と云は如何二尻を御釜と云が如し。六角なしても八方と云は如何に。四角なれども三方と云が如し。内の妻を山の神といふは如何。兒童を末杜と云が如し。鳥の栖ぬ時も鳥居と云は如何に。一文投げて三錢と云が如し。遊女を苦界と云ふは如何に。坊主に五戒あるが如し。アマ傘をから傘と云は如何に。一度着ても三度笠と云が如し。田舎に京橋あるは如何に。京に唐橋あるが如し。金持を大海と云は如何に。貧乏人を

さんすいと云ふが如し。小豆に大納言と云位は如何に。鳥に五位鸞ある如し。自慢するを天狗と云ふは如何に。生物識りを仙人と云ふが如し。貧乏な内に火の降と云は如何に。質物の流るゝが如し。土に生へねども矢の根とは如何に。弓に弦あるが如し。源五郎鮎と名付るは如何に。権兵衛蒟蒻と云が如し。裾はひら付ども肩びらと云は如何に。足を拭ふても手拭ひの如し。峰入もせぬ修験者を山伏と云は如何に。出家ながら家に寝るが如し。一年を三百六十日と云ふは如何に。九十六文を百文と云ふが如し。水を沸すに湯を沸と云は如何に。米を焚きて飯を焚と云が如しと云。

誦誦の答へ流水の如し旅僧感じ入り。然らば無理問答は暫く措き有理問答をせんと云小僧曰無理乎有理乎将茄子乎何なりとも汝が望む所に隨はむ。機玄樞を轉じて青天に電を激し。眼紫光を含で白日に星を見る。悟道の我々形小など侮るな山椒小粒でもひりゝと辛く。針は細とも縦には吞めぬ。来れ々々と塵尾取り直し左右拂する一拂す旅僧すゝんで問ていはく有機體無機體の差別如何答て曰有機體は其實不同の物より合成して其體圓也。無機體は其實同種の者より。合成して其體方なり。

又問ふ同種中其形各々個々の別あるは如何。答て云是れ物の性なり假令ば植物蓮の葉の丸く芭蕉葉の長く松の葉の細きか如く凡花枝上に咲は常なれど性に因て其花の枝に在らざる者もあり。登高自卑12の書中には。密果は實中に花咲き蕨箕（シダ）は葉背に花咲き。一葉は土中に花咲き。藁類は笠の裏面に花の咲き。又性質に因る時は。葉に運動

11 ■は禿の当て字で一に九。 12 村松良肅著の『登高自卑』（明治五年出版）。一話でも登場した。

を起すあり。合歡草<sup>ガフヘンサウ</sup>や怕羞草<sup>ハクシウサウ</sup>又垂米利加<sup>アメリカ</sup>の澤中<sup>タクチウ</sup>に草あり。其葉の上  
に蛤殼<sup>カフコク</sup>の如き者あり。両殼<sup>リョウコク</sup>の中に數毛<sup>スウモウ</sup>是れありて。蚊蠅<sup>ブンヨウ</sup>之に觸<sup>フ</sup>る時  
は。合<sup>ガフ</sup>して殺<sup>ス</sup>し其外<sup>ガイ</sup>に。花<sup>ハナ</sup>は日輝<sup>ニツキ</sup>に隨<sup>シタガ</sup>ふて。日出東<sup>ニツシュツ</sup>。午時南<sup>ゴジナン</sup>。日<sup>ニツ</sup>  
西<sup>セイ</sup>へ<sup>ヘ</sup>13と傾<sup>スベ</sup>くは。性分<sup>セイブン</sup>なれど中に就<sup>ツ</sup>き。著<sup>イチジルシ</sup>しきは向日葵<sup>カウジツキ</sup>。聚成<sup>シュセイ</sup>花  
なり又凡<sup>スベ</sup>て。花<sup>ハナ</sup>の謝<sup>シヤ</sup>しなば果實<sup>クハジツ</sup>をば。結ぶは常<sup>ジョウ</sup>なり去<sup>サ</sup>りなから。其成  
熟<sup>チソク</sup>の遲速<sup>チソク</sup>あり。喩<sup>タト</sup>へば格爾<sup>コル</sup>悉究<sup>シキウ</sup>母<sup>ム</sup>の類<sup>ルキ</sup>。七月花は開<sup>メイ</sup>け共。明年<sup>メイネン</sup>三四  
月に其實<sup>ミ</sup>始<sup>ハ</sup>て熟<sup>ジュク</sup>し榛<sup>ハミ</sup>は冬月<sup>トウグツ</sup>14(エノ)14生<sup>シ</sup>じ。明年<sup>メイネン</sup>の秋<sup>アキ</sup>に至<sup>イ</sup>て始<sup>ハ</sup>めて熟<sup>ジュク</sup>  
し。又凡<sup>スベ</sup>て種子<sup>シニツチュウ</sup>の子室<sup>シ</sup>中に在<sup>イ</sup>る。其數<sup>カズ</sup>少<sup>シ</sup>き者<sup>モノ</sup>は一<sup>イチ</sup>二<sup>ニ</sup>粒<sup>リツ</sup>多<sup>タ</sup>き者<sup>モノ</sup>は量<sup>ハカ</sup>るへ  
からず。烟草<sup>エンソウ</sup>15の子<sup>ミ</sup>は一<sup>イツサク</sup>16に凡<sup>スベ</sup>そ四萬粒<sup>アウソク</sup>あり。罌粟<sup>アウソク</sup>17の子<sup>ミ</sup>は一<sup>イツサク</sup>  
に凡<sup>スベ</sup>そ三萬二千粒<sup>イツサク</sup>。芭蕉<sup>イツサク</sup>の子<sup>ミ</sup>は一<sup>イツサク</sup>核<sup>カク</sup>に八千粒<sup>ハチセン</sup>ありと云<sup>ド</sup>植物種子<sup>トウクワ</sup>の土<sup>ツ</sup>に  
入<sup>イ</sup>らず。生機<sup>セイキン</sup>損敗<sup>ソンバイ</sup>せざる者<sup>モノ</sup>。菰<sup>スウソ</sup>疏<sup>ス</sup>の類<sup>ルキ</sup>は三四年<sup>クハキヨ</sup>。高<sup>トウクワ</sup>芭<sup>トウクワ</sup>五<sup>トウクワ</sup>六<sup>トウクワ</sup>年<sup>トウクワ</sup>豆<sup>トウクワ</sup>瓜<sup>トウクワ</sup>  
のるいは十年<sup>ムキ</sup>。麥<sup>ムキ</sup>類<sup>ルキ</sup>は數<sup>カズ</sup>百年<sup>ヒヤクネン</sup>をば<sup>フ</sup>るとても。19生機<sup>セイキン</sup>損敗<sup>ソンバイ</sup>せずと云<sup>フ</sup>ひ。  
水陸<sup>スイリク</sup>兩間<sup>リウカン</sup>住<sup>ジュ</sup>む性<sup>セイ</sup>を。得<sup>トク</sup>たる龜蛇<sup>キダ</sup>あり。淡<sup>タン</sup>鹵<sup>ロ</sup>水<sup>スイ</sup>共<sup>キ</sup>に其性<sup>セイ</sup>保<sup>ホ</sup>つ者<sup>モノ</sup>。鱸<sup>ロギョウ</sup>魚<sup>イシ</sup>鰻<sup>ワナ</sup>  
20等の如<sup>ニ</sup>きあり。冬<sup>トウジ</sup>時<sup>ジ</sup>土<sup>ツ</sup>中に蟄<sup>チツク</sup>伏<sup>フツ</sup>し。食<sup>シ</sup>も要<sup>セ</sup>せず且<sup>セ</sup>つ呼吸<sup>セ</sup>為<sup>セ</sup>ざるに似<sup>ニ</sup>  
たる者<sup>モノ</sup>。蛇<sup>ジャ</sup>蝮<sup>カク</sup>蟻<sup>ガマ</sup>の如<sup>ニ</sup>しとぞ。載<sup>サイ</sup>せてあるなり。又大小<sup>ダイコウ</sup>を論<sup>ロン</sup>すれば象<sup>ゾウ</sup>  
と鯨<sup>ケイ</sup>と駝<sup>ダ</sup>鳥<sup>テウ</sup>との大<sup>ダイ</sup>にして。蚊<sup>ブン</sup>虻<sup>マウ</sup>21の小<sup>コ</sup>なるが如<sup>ニ</sup>く。其他<sup>イテ</sup>冷<sup>レイ</sup>血<sup>ケツ</sup>温<sup>オン</sup>血<sup>ケツ</sup>の  
差<sup>サ</sup>ある。白<sup>ハク</sup>血<sup>ケツ</sup>赤<sup>セキ</sup>血<sup>ケツ</sup>の別<sup>ベツ</sup>ある。豎<sup>シュ</sup>行<sup>コウ</sup>横<sup>コウ</sup>行<sup>コウ</sup>の異<sup>イ</sup>ある。飛<sup>イウ</sup>揚<sup>セン</sup>游<sup>リン</sup>潜<sup>カ</sup>鱗<sup>カ</sup>界<sup>カ</sup>毛<sup>カ</sup>羽<sup>カ</sup>の  
相違<sup>サウキ</sup>まで。皆<sup>ソノ</sup>其性<sup>セイ</sup>に因<sup>イン</sup>らざるなく。其性<sup>セイ</sup>の同<sup>ドウ</sup>じからざる所<sup>ショ</sup>なり。又自<sup>ジ</sup>  
から其形<sup>ケイ</sup>異<sup>イ</sup>ならざるを得<sup>エ</sup>ざるなり。

13 ■は日に甫。夕暮れの意。  
14 ■■は草かんむりに柔の文字と、草かんむりに夷。茅の芽  
の意。  
15 烟草||煙草。  
16 ■はくさかんむりに朔。  
17 罌粟||ケシ。  
18 高芭||チ  
シャ(キク科の野菜)。  
19 ■は歴の異体字。「林心(へる)||經過する。  
20 鱸||スズキ。  
21 ■は小さな蚊を表す虫に蒙。  
22 合信(Benjamin Hobson, 1816-1873)著、陳修堂同撰  
『全體新論』(1857)。中国に初めて西洋解剖学を伝えた Hobson が書いた医学書の邦訳。

單刀直入活機門  
應答如流奪敵魂  
休謂小僧形似豆  
寸心胸裏轉乾坤



図2：第二話の挿絵と画讃の翻刻。  
Fig.2 Figure of the second story. (2)

又問<sup>ケタモ</sup>ふ獸<sup>ケタモ</sup>の眼<sup>メ</sup>は暗夜<sup>メクラ</sup>も窮<sup>キウ</sup>せず然<sup>シカ</sup>るに人<sup>ヒト</sup>は萬物<sup>マンブツ</sup>の靈<sup>レイ</sup>にして。反<sup>カヘツ</sup>て  
暗夜<sup>メクラ</sup>は盲<sup>メクラ</sup>の如<sup>ニ</sup>し。此理<sup>シカ</sup>如何<sup>ニ</sup>ん答<sup>コタ</sup>ふ是<sup>コト</sup>れ亦<sup>モト</sup>物<sup>モノ</sup>の性<sup>セイ</sup>なり天<sup>テン</sup>の物<sup>モノ</sup>を生<sup>ナ</sup>ずる  
一<sup>イツ</sup>ならず。各<sup>オノ</sup>長<sup>ナガ</sup>ずる處<sup>トコロ</sup>あり而<sup>シカ</sup>して人<sup>ヒト</sup>は則<sup>スナハチ</sup>其靈<sup>レイ</sup>の多<sup>オホキ</sup>を得<sup>エ</sup>る者<sup>モノ</sup>な  
り。若<sup>モ</sup>し物<sup>モノ</sup>の長<sup>ナガ</sup>ずる處<sup>トコロ</sup>のみを取<sup>トリ</sup>て比<sup>ヒ</sup>較<sup>カウ</sup>せば人<sup>ヒト</sup>猶<sup>ナホ</sup>及<sup>キ</sup>はざる所<sup>ショ</sup>多<sup>オホキ</sup>し。鳥  
の飛<sup>トフ</sup>に於<sup>オケ</sup>る獸<sup>ケタモ</sup>の走<sup>ハシ</sup>るに於<sup>オケ</sup>る魚<sup>イサ</sup>の游<sup>ユウ</sup>ぐに於<sup>オケ</sup>る。猫<sup>ネコ</sup>の鼠<sup>ネズミ</sup>に於<sup>オケ</sup>る。鷹<sup>タカ</sup>の鳥<sup>トリ</sup>に  
於<sup>オケ</sup>る。犬<sup>イヌ</sup>の盜<sup>ヌスビト</sup>に於<sup>オケ</sup>る。鷄<sup>トリ</sup>の時<sup>トキ</sup>に於<sup>オケ</sup>る。類<sup>ルキ</sup>の如<sup>ニ</sup>き。人<sup>ヒト</sup>も亦<sup>モト</sup>及<sup>キ</sup>ばざる



所<sup>ミナモノ</sup>皆物の性なり。抑<sup>ソノモツジ</sup>獸の眼は燐質多きに因て映寫敏捷の説あり。然りと云とも獸眼<sup>ケモノメ</sup>とても白晝<sup>ヒル</sup>の如く明朗ならざるは固<sup>モト</sup>よりにして。唯人よりも映寫の敏なるのみ。且つ又造化萬物に眼を賦與<sup>フヨ</sup>する各<sup>オノノタガヒ</sup>差別<sup>サ</sup>あり。合信先生著述なる全體新論<sup>ゼンタイシンロン</sup>説く通り。禽獸鱗界昆蟲の目には平突軟硬<sup>ヘイトツナンカウ</sup>の。差別の有て。又水に在り山に在り雲に入り土に入り。極めて大なる極めて小なる。畫出<sup>ヒルイッ</sup>る物夜出る物の同じからず。造化主<sup>ヒトシ</sup>均く一大範<sup>イチダイハン</sup>を以て之を造れる其中に。大同小異は之あつて。各其用<sup>ソノヤウ</sup>に合はしむる。猫虎の類は晝伏夜出瞳人長<sup>チウフクヤシユツドウニンチャウシユジョシユク</sup>。舒縮して光輝<sup>コウキ</sup>を寫す者故に鏡の如く圓<sup>マロ</sup>き時。絲<sup>イト</sup>の如く細き時あるなり。牛や馬の類は平原曠野<sup>クワウヤ</sup>を見る一途故に瞳人横長<sup>ウサキヤミマヘウシロ</sup>。兎鼠は前後觀るへき為に目晴<sup>モクセイ</sup>は。高く突き出<sup>イツ</sup>。鰕<sup>シユウゼン</sup> **■** (ドジョウ) <sup>ウナギ</sup> 23 は能も泥土に入る故に。眼目外<sup>クワイ</sup>に堅<sup>ケン</sup>單<sup>タン</sup> 24 を備へて衛固<sup>エコ</sup>し。其外に魚目<sup>キョモク</sup> (モウ) は平に睫<sup>セフ</sup> (ゲツ) はなく。珠<sup>タマ</sup>は堅固に之あつて水に宜しく鷹<sup>ヨウ</sup> **■** (ハヤサ) <sup>ハヤサ</sup> 25 は高く雲外飛揚して俯して地上<sup>チ</sup>の微物<sup>ヒブツ</sup>をば窺<sup>ウカ</sup>ひ見ては又能く嘴吻<sup>シブン</sup>の間に近視する。鯨魚<sup>ゲイギョ</sup>は目底殼堅厚<sup>コクケンコウ</sup>故ニ深淵<sup>シンエン</sup>猛濤<sup>マウドウ</sup>の中ニ入りても目を撃たず総て萬物<sup>マンブツ</sup>夫々に其性宜<sup>ウチ</sup>く得たる中唯人目の見識<sup>ミシツ</sup>を資<sup>ツ</sup>て善惡別ちつ。今を覽<sup>ミ</sup>且<sup>カ</sup>は古<sup>イニシヘ</sup>に廣<sup>ヒロ</sup>きは他類<sup>ヒキ</sup>比擬<sup>ヒキ</sup>出來る所ぞなしと載せらるゝ實<sup>ゲ</sup>に明見<sup>メイケン</sup>の示しなり。

又問ふ獸に月經の断<sup>ダン</sup>して無きは是れ如何。答ふ是亦物の性にして。假令<sup>タトヘ</sup>ば人に咳嗽<sup>ガイソウ</sup> 26 はあれども鳥獸疾病に咳嗽<sup>キセウ</sup>稀少なる如く月經なしに胚胎<sup>ハイタイ</sup>をするも固有の性ならん

旅僧<sup>リョソウ</sup>は猶も氣を上<sup>ノボ</sup>し。有理問答も亦勝てず唯此上は無言にて形状のみの問だふし小僧に困苦<sup>コンク</sup>させんと小僧に向ひ此上は無理有理共に

23 **■**は魚に善。 24 罩<sup>■</sup>魚とりかご。 25 **■**は鵲。 26 咳嗽<sup>■</sup>せき。 27 **■**は鬱の異体字。 28 臉<sup>■</sup>まぶた。 29 **■**は発の旧字でさんずに發。

勝負なし。無言問答是れ如何に小僧笑て無言乎有言<sup>ウゴンクツ</sup> **■** 27 金平<sup>コンカ</sup>。黄乎<sup>オウカ</sup>。赤白紫緑黒。五色の息を吹き出し智囊<sup>チノウ</sup>残らず翻<sup>ヒルガヘ</sup>し。無言問答持来れと泰然として一拂<sup>イツボツ</sup>す。旅僧進<sup>スヘン</sup>で両手なる拇指<sup>オホユビ</sup>と次指<sup>ヒトサシユビ</sup>をば丸めつ。如何といふの風情あり小僧両手を手一杯伸して丸く輪にしつ。喝<sup>カツ</sup>と唱<sup>トナフ</sup>る風情あり。旅僧重ねて三本の指を出せば悟れる小僧。直ちに指を五本出す。旅僧悟りて一本の指出す。小僧左右の両手にて両眼下<sup>ゲケン</sup> 28 を剥き出し大喝一聲<sup>ダイカツ</sup>加れば。旅僧驚愕<sup>ビツクリキモワケ</sup>消膽し。猫に逐<sup>オハ</sup>るゝ鼠の如く雲を霞と逃遁<sup>タウトン</sup>す

師僧透<sup>スカ</sup>さず走り入り。小僧を摩撫<sup>マブ</sup>し(ハシマ)歎賞<sup>タンシャウ</sup>し。汝の奇才感ずべし。前時問答活<sup>クアツハツ</sup> **■** 29 地謂<sup>チイフ</sup>べし禪機徹底と。世人汝を今一休<sup>イマイキウ</sup>或は祖師<sup>ソ</sup>の再来<sup>トナフ</sup>と唱<sup>ナフ</sup>る者も虚假<sup>キョカ</sup>ならず。無理有理問答遺漏<sup>イロウ</sup>なし。殊に無言の法戰<sup>ホウセン</sup>に旅僧は両手の二指丸め。突出す主意は。日月は如何と問ひし者ならん然るに汝十分に左右両手を圓形<sup>マルカタ</sup>に。開き廣げて限りなく廣大<sup>コウダイ</sup>無邊<sup>ムヘン</sup>の輪をなして答ふる主意は。日月は中々左様の小でなし。月は直径二千一百六十里の大さ有て地球をば二十四萬里離れたり日は地球の直径の殆んど八千里もあるに。一百三十萬倍の大さ有て。地球をば離るゝ九千五百萬里中々両指を丸めた様な小き事ではなき譯<sup>ワケ</sup>を両手輪にして答へしならん。次に旅僧が三本の指を突出す其主意は三千世界の問ひならん。然るに汝答へには三千世界の遠き事知るより近き足元の五大州裏の事知れと。五本の指を出せしならむ次に旅僧は一本の指出し一造化の功用如何と尋しを。汝透さず両眼を開きて眼裏に在るの意を示す。其頓才<sup>トンサイ</sup>に落膽<sup>キモワケ</sup>し旅僧は敗北致したり。祖師適傳<sup>デキデン</sup>の活禪機<sup>クワツセンキ</sup>



今月今日唯今より汝に心法譲らむと。拂子を取て與へんとすれば小僧は覲然（ロリ）と師僧に向ひ。吾師大に誤れり。彼雲水旅僧匹夫。勿躰なくも小弟を。餅肆の丁稚となし了れり。師僧曰其故如何。小僧曰彼れ初め両手指を丸めて小子に如此き餅有やと問ふ。小子答ふ中々此の如き小なる餅にあらず如此大なる餅ありと両の手廣め。至大無量の丸き輪の。形をなして愚弄せり。然るに手指三本出して其價三分なりやと問ふ。中々一二石丸めた無類の大餅。三分や壹兩で賣られる者ぞ輕蔑至極五兩々と五本の指を指出せしを。彼れ一本の指を出し壺両にまけて呉よと申すゆへ小弟忌々しさの餘りにて。両眼の下瞼を翻出し。赤べい。

## 原素坊

或る家産毎に生長を得ざる者殆ど十兒に及ぶ。而して又一兒を産す。偶然健にして呱呱（ホキヤ）として泣く。其妻其夫を呼て曰我等不幸にして産毎に皆死し。寺僧の手を経さるなし。今戒名に換へて俗稱を託せば反對縁義を以て禍を轉じて福となし。天を變じて壽を得るの機轉を得ましきに非ず。速に檀寺へ行き通稱を乞はるべしと。

夫諾して寺に行き師僧に對して。妻の分娩（サン）を述べ志願の義ありと云。寺僧卒然聞損じ。例の天死と推量し。其詞の未だ終るを待ず。扨々夫は氣の毒千萬又戒名を頼むとか委細承諾致したり。定めて愁腸察し入る。然りと云ども。諸行無常泡沫夢幻の浮世なり明ら

め玉へ。古歌に「引寄せて結ばば柴の庵にて解れば元の野原なりけり。」又「引寄せて結ばぬ柴の庵かな解さる内も野原なりけり。」また「有といへば有とや人の思ふらむこたへてもなき山彦の聲。」又「無しといへば無しとや人の思ふらん答へもぞする山彦の聲」なぞ。何れも有無を離るゝ證的にして。造化の本源を評するもの。古歌の「闇の夜に鳴かぬ鳥の聲聞ば生れぬ先の父ぞ戀しき」と云も爰の事。水起りて波となり凝て氷となり又元の水に歸す。萬物空氣より生じ又空氣に歸す。太古より毫も増減なし。今日の風雲雷雨霧露霜雪悉く是れ造化の變體古往今来多少なし。死生聚散真に環の端なきか如し。何ぞ深く歎くべけんや。青々緑竹般若に非るなく燦々たる紅花真如にあらざるなし初あれば終りあり。生あれば死あり。時去り時來て一元に歸するは天地の常體必ず愛惜に迷ひ心身を損傷すべからずと。問はず語りの早合點大に齟齬の彼の夫。詞の途切れ待兼て懇々然の御示し一々以て服膺す。然りと云ども此度の産兒男子の其上に呱呱然として恙なし困て通稱長き名を依頼せむ為め登山と聞て寺僧は膽を消し。粗忽を詫て翻然と詞改め歡を述べつゝ六十餘原素の名を摘み取て。通稱につけてやらむと。幸に彼夫の持し扇を出させ。寫し取らせる長き名は

原素坊々々「アルミニウム」「アルケンテウム」「アルセニウム」「アウルム」「バリウム」「ビスマテウム」「ボロン」「プロミウム」「カドミウム」「セジウム」「カルシウム」「カルボネウム」「セリウム」「コロールウム」「コロミウム」「コバルテウム」「クプルウム」「ディマミウム」

30 ぬからぬ顔 油断のない顔つき。

生 気 流 行 無 始 終  
寒 来 暑 往 互 交 通  
乾 坤 約 處 人 知 否  
六 十 有 餘 原 素 中



図 3：第三話の挿絵と画讃の翻刻。  
Fig.3 Figure of the third story. (2)

「エルビウム」「フェル、ム」「フルオル」「グリシウム」「ヒドロゲニウム」「ヒドラルギルウム」「インディウム」「ヨティウム」「イリディウム」「カリウム」「ランタヌム」「リティウム」「マンガネシウム」「マグネシウム」「モリブデナム」「ナトリウム」「ニツコルウム」「ニオビウム」「ニトロゲニウム」「オスミウム」「オキシゲニウム」「パラディウム」「ホスホルス」「プラティナム」「プルーム」「ルビディウム」「ロディウム」「ルテニウム」「セレンウム」「シリシウム」「ストロントイウム」「スタンヌム」「ステイビウム」「スルフル」「タンタルウム」

「テルビウム」「タルニウム」「トリーウム」「ティタニウム」「ウラニウム」「ファナディウム」「ウラルフラミウム」「イットリウム」「チンクム」「チルコニウム」。造化單純用太郎。

とぞ附たりける。彼の夫した、め終りて大に喜び家に歸て妻女に申聞せ寵愛浅からず。子故に迷ふ親心右と左に附添ひて蝶よ花よと育てしか。然に天幸此兒強健にして七八歳に至る頃力は強く氣隨に他人の小兒打撃なし。訴へられて両親者。腰辯當で謝す(ハルト)ばかり。

或日一童急遽走り来て大音上。原素坊々々云云造化單純用太郎君道路の井の中へ墮落したり、早く来て救ひ玉へと子共心の正直に。長き名の邪魔になるをも厭はこそ。初より終りまで阿房律儀に長々しくも呼び称へ。時間費し走り行く。母は是れ聞き狂氣の如く頓に狼狽(ウロ)是も亦。長き名邪魔の思案なく。夫を呼て同じ名を長々呼て急を告ぐ。夫も共に狼狽して同く長き名を呼て何々々々何とした。内の原素坊云云用太郎が井の中に墮落したとやこりやたまらぬと掘引挑げ素足で飛出し韋駄天走り矢の如く。土砂を蹴立て、駈来り見れば他人に救はれて。幸通る醫師もあり。藥貫て蘇生なす両親歡喜天に満ち三拜九拝厚く謝す。醫師は繼發續症を防ん為に煎劑を渡せば親は受取て。生姜は入るか入らぬかと問へば生姜は入らねども。芥子一撮みを入れて煎じよと云へば両親大笑ひ世の中多き醫師なれど。遂に芥子を煎藥に入れたる事は聞初めと呵々と大笑するを見て醫師は靦(ロリ)然ぬからぬ顔<sup>30</sup>。是れ々々々親共よ。さう笑ふては利んがな

## 歌道之齟齬

へい隠居さん御免。誰じや私し。私しては分らんまあ這入れ。這入て居ます。マア上れ上つて居ります。隠居出来り。ホ、誰じやと思へば阿房の太郎か。是れ隠居さんいつ連も私を侮り阿房の太郎と唯取た様に申されますれども私しにはどゑらひ兄分が有ます。隠居云汝か兄分とはろくな奴ては有まひ誰じや。ビツクリなさるな。八幡太郎様じや。何を云ぞ勿躰なひ罰が當る。其方とは提灯に釣鐘御月様に鼈。此鼈も相違にて月と朱盆程の相違がある。此鼈と朱盆の相違で思ひ出した。硝子を逆様に釣と云譬へがあるが。是も硝子を櫻に釣るの相違じや扱汝が様な分らぬ奴は八幡太郎様と番太郎義経様と向ふ臍と同じ様に心得る大阿房じや。夫じやに由て手前を饅頭屋の丁稚と云はい。夫者なでござる。「アソック」と云事じや。隠居さんの事を餅屋の親父と申します。何と云ぞ「ボンソック」と申ますウダくいふな。隠居さん此書は何と申します。漢楚軍談<sup>31</sup>といふ書じや。夫は嘸痛ふゴザリマセウ。何といふぞ。疳疔<sup>32</sup>なんだと仰らるゝではコザリマセヌか馬鹿を云へ漢と楚との書物しや時に隠居さん彼の百人一首にござりまする行平てきさんは狐でござりまするか。てきさんとは勿體ない。中納言行平様と云御方じや。然らば奥様は土瓶の方と申しますか。阿房云へ。夫でもコイツ狐に相違ない。コイツとは勿體ないなぞ狐じや。立別れ因幡の山の峰に尾を振るとあるでは御ざ

りませぬか。夫は因幡山の峰に生ふると云事じや。夫でもキヤツに未だ證據があるキヤツとは勿體ないそりやなぞじや「待つ年間ば今歸りコン」と鳴くではござりませぬか。ウタ々々云な其様な相違な事を讀だ發句が有る「引鶴や下駄と雪踏とはき違へ」「木枯の鼻まで透る涙かな」「七夕や浮雲さうなる甘徳利」「稻妻や胴金入を落しさし。」などの類じや大いな相違じや

當時は則文明開化汝の様な阿房では中々渡世は出来まい汝に學問セヨと申ても中々容易にする事では有まいちと敷島の道<sup>33</sup>でも嗜んだら人情も分り。上品の人と附合出来富貴の人の最層を受けて安樂に暮させまいものでもない敷島の道はどうじや。隠居さん敷島の道へ蹈込て安樂に暮されますれば善は急げじや今日より趣きます扱私は耻を云はねば理が聞えませぬが花街の道より外は知りませぬ其道御指南下され早く敷島とやら云安樂に暮される寶の島へ渡て安心致したい。御安い御用じや路用四五両貸しなされ。ドレ一走りと裾引からげ立上る。隠居は制して是れ々々又しても世話しない粗忽な阿房じや。太郎曰有り様の真中ト、左様ジャイ斯程見通しの知恵を持たなから何で天下を取らしやらぬぞ。隠居曰ウダく云な。夫れ敷島の道を云は寶の島と云様な事でなし。古語にも君子は義に喩り小人は利に喩ると云て兎角汝は賤しい事に悟り居る其上人の物を借るに御安い御用とぬかし居る。無遠慮な奴じや。先づ復坐して承れ。敷島の道を語り聞さん夫れ敷島といふ事は蓋し日本指すの言 神武天皇天下をば定めて大和敵傍山。初めて都定めらる和歌は大和の歌の略敷は大和に上下

31 夢梅軒章峯（湖南文山）『通俗漢楚軍談』（1695）  
敷島の道＝和歌の道。

32 疳はひきつけ、疔はできもの。



の。城の郡の有る故に敷に通する文字ならん島は日本全國を指す詞にて和歌といひ敷島といふ名稱は総て大和に寄る詞抑和歌は皇國に一種美風の國體となりて。敷島々々といふは。畢竟大和歌稱する詞八雲たつ出雲八重垣の名歌に始りて其徳天地人心を感動するに至る。仰べし尊むべし。前にも云如く敷島の道と云は歌道にて寶の島と云事に非ず。實は田からにて田から生出る五穀の類を指て云島より出る者に非ず昔秦の始皇帝徐福に命じて長生不死の方を蓬萊方丈瀛州の仙島に求むなどと云説あれども徐福は日本紀州熊野に來て留り死すと云是れ別に仙島あるにあらず。畢竟日本富饒の國を指て来るなり。世に鬼界ヶ島と唱へ。仙人島と呼ふ。是れ皆虚誕にして外に仙あり鬼あるに非ず。抑動物炭酸水室の四元素を基礎とし。加るに燐硫鉄石灰土等の諸元素を以て成立せざるなく。其成立大同小異ありと云とも悉く造化一大範圍を以て成ざるなく。中に就て人は其秀を得る者なり鬼と云ひ仙と云者真に有べきの理なし。鬼は歸なり造化縮殺の氣を指す仙は山人なり山林の間へ隱遁の人を云佛家の鬼と云は方便の説なり源頼光鬼神退治の説は強賊を誅するなり般若面の鬼女は婦人の嫉妬を象るなり。亜非利加州昆崙國の黒奴ト云は細胞體固有黒色の液に係るよし。別に怪むに足る者なし。

抑和歌の人心を感じずるや。昔太田道灌若年の時獵に出途中雨に逢て民家に入り簀を借らんとす。其家一處女あり太田氏の貴容貌ならざるをしり。妄に詞を交へず山吹の花一枝を盆に載せ恭しく之を捧ぐ道灌其意を解せず快々として館に歸て諸臣に其状を語る。一臣

34 ■はさんずいに峽の右側。水がめぐるの意。

35 ■は上に日。

あり曰此女必ず歌人に候らはん古歌の「七重八重花は咲ども山吹の實の一つだに無きぞ哀しき」の語を以て。簀の無きをば風流に返歌なしたるにぞ候らはんと。聞て道灌大に耻ぢ汗流れて背に■34り吾れ苟も一城の主として民間の一女子に劣ると是れより奮發して和歌の道を學び與■35を得たり



図4：第四話の挿絵と画讀の翻刻。  
Fig.4 Figure of the fourth story. (2)

知否頓才生禍機  
吠虚誤實得群譏  
盆花不異賢愚異  
道灌事情天地違

之を仙柳傳に評して「道灌も金を借せかと初手思ひ」の句あり。道灌後來陳没(ウチ)の時一人槍を以て道灌を突き汝歌人此に至て一句な

きやと云道灌取あへず「斯る時左こそ命の惜からめ兼て亡き身と思ひ捨ずば」の名句を残し譽れを千歳に留む汝も和歌の道を習ひ得ば天地人心をも感動するに至るべし小野の小町は「理や日の本なれば照りもせめ去りとはまた天が下とは」の名句にて雨を降らせしといひ傳ふ畢竟是は偶然又は附會の説なるべけれ共歌の理推しは面白し新田義貞は勾當の内侍に戀慕して「我袖の涙に宿る影とだに知らて雲井の月や澄むらん」の名歌を詠して鬱胸を遣る天子歡感あり且つ其情を憐んで内侍を賜ふ源頼政は「登るべき道しなければ木の本に椎子を拾ふて世を渡るかな」の句を吟じて三位を得たり。其他和歌の人心を感じる枚擧すへからず。汝も和歌を習ひ得ば又鬼神をも感しなん。民間の女子たり共一城主太田道灌を感動せりと云

太郎は例の早合點何に夫れ式の事は知れた事我も山吹折取て人を感動させて見ん隠居さらばと勇みたち席を蹴たて、馳歸り山吹一枝盆に載せ人や来ると待居れども生憎人の影も来ず太郎殆んど退屈し意地の悪るき餓鬼共とつぶやきながら門へ出て門前通る旅人を呼て若々々簣の御用はござらぬか。簣は入用之れなきやと。問へば旅人禮を述べ。御深情は辱し。併今日白日晴天空に一點雲もなし。簣には用事なしと云太郎ハエ、氣の利かぬ旅人かな。是非共簣借せと申さるべしと強ひ付れば。旅人忙れて是れ亭主。奇な事を申す人かな。見ず知らずの我々に無理強情に物借すと云さへ有に。此晴れに。雨具を無理に借さんとは。狂氣に相違あるまじと足を早めて走り行く太郎は終日門前を過る人をば呼留め簣を々と叫べとも天色清朗相手なし既に日

も暮れ夜に入りぬ。一人内に入来る足音聞て御出たなと喜び勇み待つ所へ御無心ながら提灯借して玉はれと望めば案に相違して簣にては御坐らぬか定めて簣の用ならんと云へばイヘ々々相違なし提灯借して賜はれと望めば何と詮方も理會も盡て是非もなく今は何つ迄待つべきと盆に載せたる山吹を目八分に持捧げ恭しげに差出す旅人一圓合点せず。我々願ひは提灯なり山吹所望は致さずと云へば太郎は聞ぬ顔はれにて悟り召されよと云へば旅人不審して是は御亭主何の咒に候やと云太郎は腹を立てエ、悟の悪るい貴公は歌道に暗ひなと云へば旅人ぬからぬ顔で知れた事「カド」が暗ひから提灯を借るのさ

### 馬之後足

諺に曰狂言綺語も贊佛乗の縁とあり世上盛に行はるゝ演戲俳優の技何れ勸善懲惡の道に非るなく善惡應報禍福影響の理を想像せしむ爰に田舎一豪家の老人神社佛閣巡拜して都會へ出て。市中にて不故郷無頼の若者馬鹿の名を得る六太に逢ふ老人曰是者珍し馬鹿六ではないか是は備前屋の隠居さんで御坐りますか能こそ御登り遊されました先つ御健固にて珍重に御坐ります隠居云馬鹿や其方は國元て馬鹿の間屋と云はれた者家出してから五六年何して居ると案じて居たに見事餓死（ジニ）もせず健固で居しは不思議な事と挨拶すれば馬鹿六はぬからぬ顔で隠居さん。私しを馬鹿六々と唯一口に宣ども諺にも云一寸の蟲にも五分の魂五尺の身には二尺五寸の魂が有か無かは知らね

ども所謂人は萬物の靈と生れて居る私し馬鹿や阿房と罵れど彼の古歌にある「浮きくとしたるやうでも瓢たんの胸のあたりに締括りあり」と讀みたる句の如く有らば善らん。

山嶽の嶷々然として高きのも。江河の流れ盡きずして。洋海満る事なきも空氣に育つ動植も水に生する魚族まで萬古盡ざる一乾坤造化者流の精巧を稟て此世へ來た私。生理發蒙<sup>37</sup>書中に曰先づ動物を四屬に分つ其一を耀輝屬とす。剥麗布海星海月の類は是れなり。其二關節屬とす。無血蟲蜘蛛蟹蝦の類是也其三を軟體屬とす。牡蠣烏賊蛸蛭(ナメク)の類是なり。其ノ四を脊骨屬とす。動物の靈属皆是類に屬す又脊骨属を四類に分ちて其一を魚類其二を蟲類其三を鳥類其四を胎生類とす氣海觀瀾<sup>38</sup>書中に曰動物中人最貴くして上級に居る。其他の物を分ち類を立る事左の如し。一に曰蠕蟲即ち蚯蚓<sup>39</sup>等足なき者是なり。二に曰無血蟲又化蟲と云此物甲狀の関節あり。蚊蠅蠅蚕蝦貝類(カイコ エビ)<sup>40</sup>是なり三に曰魚此物肺なし腮<sup>41</sup>をもつて呼吸す。四に曰水陸両間に住する者即ち蝦蟇。蛇等これに屬す五に曰鳥此者翼あり六に曰乳養する物即ち牛馬犬猫鯨等はなり。胎生し且母乳を以て是を育ふ。此六種中蠕蟲無血蟲は唯白液あり或は青液なる者あり。魚及水陸両間に住する者は冷血あり。人獸鳥鯨は温血あり。何れに多き萬物の長となりたる人身の。我々なれば隱居さん人に鋭鈍ある逆も同じく稟し天の性研かばなとか照らさん古語に所謂其進む疾者こそは退くも速なりと有る習ひ灼々と咲く園中の花早ければ先づ萎み

遅々と急がぬ松こそは鬱々然と晚翠を含む教も御坐らずや種子の萌生するにさへ芥子一兩日の間に早く萌え出で薔薇こそ二年を歴たる其後に始て發生する由を村松先生著述なる登高自卑<sup>42</sup>に載せらるゝ、

侮り玉ふな此節は役者となつて名も高き市川團十先生の門弟となり幸に此節興行半にて見る人群集雲をなす故郷の好隱居さん。明日御覽賜はりて何卒衆の其中にて。奇妙と譽めて藝道に花を咲せて賜はれと一向頼めば驚く隱居是れは々々六太郎水の流れと人の行末と云事あり國元では馬鹿六々と九十九文刺しばかりの様に賤しみ居たが。何じや此節は役者に成り居ツタカ出来た々々氣の利た商売になつた。見物せいて何とせふ。國へ歸て噺の種明日手練見物し譽めるで有ふ去ながら其方名前は何と云ふ又役割は何役で標題何の藝なるぞと問はれて六太困り入り手持無沙汰に云兼る隱居頻に問ければ六太窮して是非もなく市川團十郎門人にて市川團子と申ます隱居笑て團子とは一口に吞れてしまひさうな名前じゃ夫れはさうと標題は何じや。一の谷でござる夫は面白ひ標題じや。シテ役割はと問はれて六太は困り入り。二段目の直實と敦盛と組打の場を勤めます夫は勇ましい憐れな場じや。汝の役は直實と云勇士か六太曰然らず隱居曰敦盛と云若武者か六太曰中らず隱居然らば玉織姫か六太曰中々隱居曰平山武者所乎。六太曰又脱れたり。隱居大に訝り然らば何を勤るぞ外に役割の考べきなし。抑其方何役を勤るぞ六太ホロリと弱り入り。頭上より汗の煙をたて隱居さん今は是非なし清水の舞臺から飛ぶ氣に

37 島村鼎甫(1830-1881)『生理發蒙』(1866) 蘭語医学書(Douwé Lunbach 著)の翻訳もの。

38 青地林宗(1755-1833)『氣海觀瀾』(1835) 39 蚯蚓=みみず。 40 蠅は亡虫と蚕の異

体字 41 腮=えら。 42 村松良肅(1827-1879)著の『登高自卑』(明治五年出版)。一話と

二話でも登場。



て思ひ切て申すべし隠居曰仰々しひ名乗やうじや早く云へ六太曰實は熊谷直實の乗たる馬の後足なり。明日御覽是れあらば熊谷乗たる馬の後足奇妙々々。市川團子出来マスト譽て賜はれ隠居さん  
 隠居は聞て二度驚愕。暫し忙れて詞なし。漸にして六太に向ひ。是れは々々存も寄らぬ役何れ夫れ位な事で有ふとは思へとも餘り初めの萬物の靈の詞が立派故可なりな役者に成たかと思の外の意気地なし責めて婢僕か丁稚でも勤める事か先刻の。萬物靈の人身の自慢にも似ず畜獸の真似で世渡る馬の足先にもならず後足になつて平氣も矢張り馬鹿。馬鹿の馬の字は終身取れぬ。不便至極と歎ずれば。六太彌慚愧して身の上告て面皮なし。耻を云はねば理が不聞。役者に成つて四五年も馬の後足勤れど。一度も褒詞得し事なし多年の好しみ隠居さん。此世の思ひ出後生の功德何には兎もあれ是非共に馬の後足妙々と譽て賜はれ隠居さんと。涙と共に頼みける隠居大に迷惑し。何所の何國へ往たとて馬の後足譽る馬鹿。有べきかはと思へども馬鹿。に凝たる馬鹿六が一途の頼み詮方なく澁々ながら受合て翌日場處へ来て見れば集る人は雲の如く引く天幕は霞の如く麗人花を飾り美女玉を粧ふ俳優出沒技を争ひ術を競ふ看客忙然心酔し奇を譽め妙を賞歎し憂世忘る、別世界狂言綺語も讚物乗何れ勸善懲惡の道に非る者はなし世の諺に云ふ通り泣ずして泣真假するを泣ながら泣ぬ顔する演戲看客云々と天理人情皆同し仁義忠孝誰人能感徹せざる者あらん



図5：第五話の挿絵と画讃の翻刻。

Fig.5 Figure of the fifth story. (2)

虚裏含真其奈何  
 滑稽媒至自然和  
 世間失脚人知否  
 前屁後鳴齟齬多

既に二段目組打の場となりければ名も高き武蔵の國の住人私の黨の旗頭熊谷次郎丹治直實武具爽に鎧つ、日の丸の軍扇輝かし黒き馬上に跨りて威風傍を拂ひつ、優々然と乗り出したり隠居爰ぞと大音上熊谷次郎直實の乗たる馬の後足奇妙々々市川團子出来ますと聲を限りに叫びしかば團子は歡喜限りなく天へも登る心地にて我身忘れて勇み立ち。イヒン。イヒ、ント。嘶ひて。四方八面飛び狂ひ前後不覺にはね廻る。前足大に困り入り

樂屋に入て吐息突き團子に向ひ扱々困り申たり汝口もなき後足の身

分を以て滅多無性に嘶<sup>イサ</sup>ひて飛たり蹴たりはね廻<sup>マ</sup>り騒き狂ふは何事と。云へは團子はぬからぬ顔兄貴ぬかすな兄貴にも失策<sup>オチド</sup>あり。大學とやら云ふ籍<sup>ホシ</sup>に君子己<sup>オノ</sup>れに有て后人<sup>ノチヒト</sup>を求め己<sup>オノ</sup>れに無うして后人<sup>ノチヒト</sup>を非<sup>ソシ</sup>るとゴザラズや能く考へてゴラフジロ。世の諺にいふ通り。寧<sup>ムシロ</sup>鶏口<sup>ケイコウ</sup>となるとも牛後<sup>ギウゴ</sup>となる事なかれとか是あれど人の前には得立<sup>エタ</sup>ず牛後となる我れくが愚かな事は知れた事汝は人の前にたつ其前足の身を以て勝手次第に屁を放<sup>コ</sup>くにあらずや

滑稽 窮理 臍の西國初編終

## あらすじと解説

### 1 手と指の違い

金持ちの主人が廓の遊女に惚れ込み、その遊女も主人に応えていた。この話を友人に話すと大笑いされ、女は金が目当てでただけだろうという。そもそも金で女心をつなぎとめるのはもう古く、文明開化の現在では自然科学の学識を持つ者がモテるのだ、と友人は説得するが主人はほとんど納得しない。そこで友人は、隣室で襖越しにその遊女と窮理先生との会話を聞いたことを話し始める。始めは愛想のなかった遊女だが、先生が話す宇宙や動物植物など次々に出される博識にすっかり惚れ込んでしまっていた。遊女は先生に誠を誓って指を切ると言っていた。それを聞いた主人が、俺のことは何か言っていないかったか、と友人にたずねると、「君とは手を切る、と言っていた」。

武藤⑥によれば、手切れ丁稚と言われる落語をなぞったもの。もとの話は、隠居が囲っている妾の行状を丁稚に探らせる話。浮気している妾に買収された丁稚は「姐さんは、旦那さんのためなら、どんなことでもすると言っていました」と隠居に報告する。「わしのためなら指を切ると言ったのか」と御隠居がたずねると、「指どころじゃない。金をくれたら、手を切ると」。

この話に登場する窮理先生の話は、天の川が太陽のような恒星から成り立っていることから、食虫植物の話など生物種の分類の境界にあるものまで幅が広い。窮理が広く自然科学の意味だったことがわかる。筆者は生物に詳しくないが、調べたところ、本作中に登場するファリスネリアは水生植物のセキシウム属の学名 *Vallisneria* だろうか（実を結ぶとき動くかどうかはわからない）。動物と植物の間のポレーペンとは、もしかしてブラウン運動する花粉 (pollen) のことだろうか。何も力を加えなくてもいつまでも動き続けるブラウン運動の原因は、アインシュタインが1905年に、水分子が花粉を蹴り上げているモデルを示すまで、不思議な存在だとされていた。いまの私たちは、出版当時とは別の読み方で楽しめる。

### 2 無言問答

旅で立ち寄った僧が、十歳足らずの小僧に言いがかりをつけ、無理問答をしかけた。「嘘をつくことを鉄砲というがこれ如何に」「誠のことを真剣というが如し」といった問答が続くが、旅僧は勝てない。そこで無理問答に変えて挑む。「有機物と無機物の違いは如何に」「同じ種でも形状が違うものがあるのは如何に」小僧はすらすらと動物や植物の例を挙げて百科事典並みの答えを返す。勝ち目の見えない旅僧は最後に無言問答をしかける。

無言問答の部分は次のようだ。旅僧が両手で親指と人差し指で大きな輪を作った。これを見て小僧が両手をいっぱい伸ばして輪をつくる。これを見て旅僧が三本指を出すと小僧は五本の指を出した。これを悟って旅僧が一本だけ指を出すと、小僧は怒って両眼をきつとして旅僧を睨み返した。この仕草で旅僧は退散した、という仕草のやりとりである。隠れて見ていた小僧の祖師が解説する。旅僧は輪をつくって太陽と月について尋ねた。小僧は太陽と月はその大きな大きさではないと答えた。次に旅僧は三本の指で三千世界について尋ねた。小僧の五本の指は、足元の五大州をまず知れと答えた。最後に旅僧は一本の指を立てて造化の役割を尋ねた。小僧は目を開いて、自分の目の中にあると答えた。旅僧は敵わないと感じて退散した。祖師が小僧を褒め称えようと、小僧は違う、という。旅僧が手で作った輪のサイズの餅があるかと尋ねたので両手を広げてもっと大きなのがあると答えた。旅僧が三分で買えるかと聞いたので五両だと答えた。だが一兩にまけてくれ、と言われたのでとんでもないと睨み返した、と。

最後の無言問答は定番落語「蒟蒻問答」に出てくる流れを用いたもの（⑥の武藤による解説）である。住職不在の寺へ行脚僧が尋ねてきて一問答を申し入れる。蒟蒻屋稼業の六兵衛が和尚の代わりとなって無言のまま対応する。行脚僧は無言の行中と勘違いし、手指で無言問答をする、という流れである。この「蒟蒻問答」の原型は中国明代の文献にも見られ、トルコや朝鮮でも同種の話が見られることから、仏典から派生した小噺と思われる（①らしい）。

有理問答の部分は、『登高自卑』と『全體新論』の書からの引用と小僧が自ら話しているように、当時入手できる知識を正確に披露している。しかし、無言問答の解説で祖師が説明する地球・月・太陽の直径や月や太陽までの距離の値は、一読すると間違っているように思われる。里で表記されているが、これらの数値はマイル (1.6 km) での値と解釈する

と正しくなる。福澤諭吉が『窮理図解』で示した値は、里で表記されているが、こちらは 3.9 km の単位である。増山本人が英語の文献をもとに探し出した値なのかもしれない。

### 3 原素坊

ある夫婦には子供が産まれてもすぐに亡くなってしまうことが続いていた。やっと産まれた子は元気な泣き声を聞かせてくれたので妻は夫にお寺のお坊さんに、戒名ではなく俗名をつけてもらうように提案する。夫がお坊さんに相談すると、早合点したお坊さんは、また子が亡くなったと勘違いして慰めの言葉をかける。ずっと慰めの言葉を聞いた後、夫がようやく男の子が元気でいられるように長い名前をお願いしに来た、と話を通じる。お坊さんは、それでは、と元素の名前を60個含んだ名前「原素坊々々・・・用太郎」をつけた。

元気に育った「原素坊々々・・・用太郎」は、友達と遊んでいる最中、井戸に落ちてしまう。こどもが母親の元へ駆けつけて「原素坊々々・・・用太郎」君を助けて、と知らせる。驚いた母親は父親に「原素坊々々・・・用太郎」が大変だと告げる。父親が「原素坊々々・・・用太郎」の状態を確認しようと井戸に駆けつけると、すでに他人に助け出された後だった。通りがかった医者には蘇生してもらい、薬ももらう。親がこの薬には生姜を入れるのかと聞くと、医者は生姜はいらないが、辛子をひと摘み煎じて入れよ、という。辛子を煎じて入れるなんて初めて聞いた、と大笑いする親に、医者が「そう笑っては薬は効かない」と落<sup>サゲ</sup>の一言。

よく知られた寿限無の話である。名前の部分はアルファベット順に元素の名前を60個つけたことになっているが、実在する元素名もあれば、そうでないものもある。当時の人々にとってはどれも新しい名前だったろうから、その区別までは思い至らなかったことだろう。ちなみにメン



デレーエフが周期表を提案したのは1869年だが、その周期表の価値が認められるのは未発見のガリウムが発見される1875年以降である。当時は60個の元素が混沌としていた時代だった。

最後のサゲの一言は、「からは気短か者に掻かせよ」とか「ワサビをおろすときは笑うな」という俗説を使ったものようだ。からはのんびりしていると辛味が飛んでしまうのではよく搔いたほうがよい。ワサビはおろし金で力を入れて細かく擦れば擦るほど辛さが増す。笑っているのは辛みが効かない、という言い伝えである。

#### 4 歌道のくいちがい

少し早とちりで学の足りない太郎が御隠居さんを訪ねてきた。御隠居さんは太郎に、歌道の道（敷島の道）を勧めることにした。太田道灌が歌を嗜むことになったきっかけとして、狩りに行った時に雨に降られ、民家で簀を借りようとしたときの話を語る。民家から出てきた女性は何も語らず道灌に盆に載せた一枝の山吹の花を差し出した。その場で意味がわからなかった道灌だが、後で家臣から簀がなかったことを古歌に例えて返したことだと教えられ、我が身の教養のなかったことを恥じた、という。これを聞いた太郎は、ならば自分も簀を借りたい人に山吹の花を差し出して、その人を感動させようと飛び出した。晴れている日に簀を借りたい人は現れず、太郎から「簀を借りないか」とまで声をかけても空振りばかり。日が暮れて、一人旅人が提灯を借してくれと入ってくる。「簀ではないのか」「ちがう。提灯だ」そういわれても太郎は山吹の花を差し出した。理解に苦しんでいる旅人をみて、「歌道に暗い人だな」というと、旅人は「門が暗いから提灯を借りたいのさ」

後半のくだりは、代表的な前座噺『道灌』と同じで、最後の一言は、歌道と門をかけた洒落である(7)。この第四話では、窮理に関する知識はわ

ずかで、生物をつくる元素は炭素・水素・酸素・窒素の基本四種の元素であること、黒人は肌の色が違うだけだ、などに過ぎない。その代わり、この話では、太田道灌の逸話だけではなく、「敷島」の言葉の由来や、小野小町・新田義貞・源頼政の詠んだ歌も紹介される。増山守正は、静香園丹蓉の号を持ち、『静香園詩文雜稿』3篇ほか『丹蓉俳諧発句集』『丹蓉発句瓦礫集』なども出版している。その中には多くの漢詩や武将に関する文章も含まれる。彼にとっては、少しだけ教養をここで披露した、という程度のものようだ。

#### 5 馬の後足

街を歩いていた御隠居さんは、同郷の六太郎に出会った。昔は馬鹿の六太郎と呼ばれていた者だ。御隠居さんは六太郎に学の大切さを悟す。そして『生理発蒙』『氣海觀瀾』『登高自卑』の書から得られる動物分類学の知識を紹介した。六太郎は、今は役者となって興行に來ているのだという。御隠居さんが役者名や演目を聞き出し、何の役をやるのかと聞き出すと、六太郎は焦らしたのちに熊谷直実の乗る馬の後ろ足の役だと白状する。そして、いままで役を褒められたことがないので明日はぜひお願いしたいと御隠居に頼んだ。馬の足の役者を褒めるなど馬鹿馬鹿しいと思いつつ、御隠居は舞台を觀に行き、馬が出てきたときに声を限りに六太郎の役者名を叫ぶ。馬の後ろ足は喜んで飛ぶは跳ねるは大騒ぎ。おまけにヒヒーンと後ろ足からいなくな始末。楽屋にもどった六太郎は前足役の兄貴役者に怒られる。「後ろ足の分際でなにごとか」しかし、六太郎にも言い分が。「前足の役者は屁をこくな」

落語『武助馬』の筋をなぞる話である。この話は江戸落語の元祖と言われる鹿野武左衛門作の「堺町馬の顔見世」が原話となっている(8)。(この噺に絡んで、武左衛門は江戸で流行した疫病で荒稼ぎした詐欺行為に

巻き込まれ、投獄されてしまうエピソードも知られている(8)。

この話では、前後の筋に関係なく、やや突飛な形で、生物分類学の詳しい話が挿入されている。増山守正は、西洋医学も修めた医者でもあり、また、『植物異名拔萃一覽表』(1877)『動物異名拔萃一覽表』『万物類名拔萃一覽表』なども著している。分類学の話が随所に展開されているのは、ちょうどこれらのリスト作成も並行して行っていたからだと思われる。

### 本書の時代背景

冒頭でも触れたが、時代が明治になってからのおよそ十年間、窮理熱とよばれる自然科学入門書の出版ブームがおきた。その多くは、西洋の子供向け・青少年向けの本の抄訳あるいはそれらの孫引きであったが、本書は落語を語り口にしたもので特異な位置づけである。本書の存在は、手元の書によれば、辻哲夫<sup>9)</sup>、橋本萬平<sup>10)</sup>、山本義隆<sup>11)</sup>らが短く触れる程度のもので、いずれも、窮理熱の証左として挙げられている。ここでは、全文を丁寧に読むことによってわかる次の点を指摘しておきたい。

一つは「窮理」という用語の使われ方である。現代の「物理」の語源として説明されることが多いが、本書に挿入された話が生物系の話を含んで展開されていることから、「窮理」という語が自然科学一般を指していることがわかる。もともと、「窮理」という言葉は儒学用語であるが、幕末の蘭学者がNaturkunde(英語でNatural Philosophy、あるいはPhysics)の訳として使い始めた。当初、訳語が一定することではなく、帆足万里らは「窮理」を用い、青地林宗・箕作秋坪・大庭雪斎らは「格致」を、緒方洪庵らは「物理」を、赤坂圭斎らは「理学」を用いた。いずれも近代物理学の受容の時期に「形而下の事象(可視的なものごと)」を総称する言葉として使われた<sup>12)</sup>。明治初年の福沢諭吉の『窮理図解』が大ヒットしたため、窮理の語が人々に浸透した。明治五年に学制が公布さ

れたときには、科目名称の一つに「理学」が登場したが、同年に小学教則・中学教則が出されて「窮理学」と訂正され、さらに翌年教則変更改正が行われて再び科目名が変更された<sup>13)</sup>。小学生向けの官製教科書としてはじめて作成された片山淳吉編集の『官板・理学啓蒙』は題名のみ『官板・物理階梯』に改めて出版され、高学年の窮理学は物理学・博物学・化学・生理学・星学に分岐した<sup>14)</sup>。本書はそのような過渡期に出版されたものである。本書『滑稽窮理臍の西国』は後に題名を変えた『臍の西国あご落とし』(明治19年)として再販されているが、窮理の名称がなくなったのは、この辺りにも理由がありそうだ。

もう一つは、著者の増山守正が、出典を記載しながら窮理の蘊蓄を詳細に紹介していることである。三回登場する村松良肅『登高自卑』(1872)の他、合信著・陳修堂同撰『全體新論』(1857)、島村鼎甫『生理発蒙』(1866)、青地林宗『氣海觀瀾』(1865)がそれであり、いずれも翻訳をベースとした硬派な書である。増山は医者を務めた後、京都府で教官となり、上京して文部省勤務を経て、最後は東京博物館属に任じられた。生粋博学のインテリでもある。本書第四話には、御隠居さんが夢梅軒章峯(湖南文山)『通俗漢楚軍談』を読んでいることが一言登場するが、これは後に増山が『静香園詩文雜稿』に残す歴代偉人寸評の資料に違いない。本書で書かれた落語では、窮理の知識が筋に直結するものではなく、いずれも教養や造詣を促す意味で紹介されている知識に留まっている。本書は「初編」として出版されているが、続編は見当たらない。おそらくこれらの落語が実際に上演されたことはなかったであろうが、ここで披露された内容は、当時の人々にとっては一歩先の内容であり、その意味でも当時の文化を窺い知ることができる資料である。

謝辞 情報科学部情報システム学科の横山恵理准教授には、翻刻のルールをご教示いただいたり、難読字の解説などでお世話になった。また、丁寧にお読みいただき、多くのミスをご指摘いただいた匿名の査読者に感謝申し上げます。本稿の作成にあたっては、科研費・挑戦的研究(萌芽)『天文学の創設：天文と文化遺産を結ぶ文理融合研究の加速』（課題番号 19K21621、研究代表・真貝寿明）のサポートを受けた。

## 参考文献

- ① 日本学士院編『明治前日本物理化学史』（日本学術振興会、1964）
- ② 板倉聖宣・永田英治編著『理科教育史資料 第6巻』（東京法令出版、1987）
- ③ 増山守正『明治新撰 百家風月集』（増山持正、1895）  
跡見学園女子大学図書館 [https://trc-adeac.trc.co.jp/html/Home/1171055100/topg/jpeg\\_list/0010101160.html](https://trc-adeac.trc.co.jp/html/Home/1171055100/topg/jpeg_list/0010101160.html)
- ④ 増山守正『滑稽窮理・臍の西国』（福井源太郎、1877）  
国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/882686>
- ⑤ 増山守正『滑稽窮理・臍の西国』（福井源太郎、1877）  
舞鶴市糸井文庫 書籍閲覧システム  
[https://www.dh-jac.net/db1/books/search\\_maiduru.php](https://www.dh-jac.net/db1/books/search_maiduru.php)
- ⑥ 増山守正纂述、武藤禎夫解説『滑稽窮理・臍の西国』（太平書屋、2009）
- ⑦ 武藤禎夫『定本落語三百題』（岩波書店、2007）
- ⑧ 延広真治『江戸落語 誕生と発展』（講談社、2011）
- ⑨ 日本物理学会編『日本の物理学史 上 歴史・回想編』（東海大学出版会、1978）
- ⑩ 橋本萬平『科学史の横道』（日本古書通信社、2008）
- ⑪ 山本義隆『近代日本一五〇年 科学技術総力戦体制の破綻』（岩波書店、2018）
- ⑫ 中村邦光『日本における「物理」という術語の形成過程』学術の動向 11（2006）90
- ⑬ 板倉聖宣・永田英治編著『理科教育史資料 第1巻』（東京法令出版、1987）
- ⑭ 板倉聖宣・永田英治編著『理科教育史資料 第2巻』（東京法令出版、1987）